

# 京都御所 飛香舎(藤壺)の調度

2018年10月2日(火)~12月25日(火) 東京国立博物館 本館14室

飛香舎は平安時代の内裏の後宮十二殿舎の一つで、壺庭(中庭)に藤を植えたことから、別名を藤壺ともいい、『源氏物語』などの古典にも名高い宮殿です。

平安宮の内裏は、天徳四年(九六〇)の焼亡以来、江戸時代末期まで幾度も造営されました。とくに寛政二年(一七九〇)と安政二年(一八五五)に造営された内裏は紫宸殿や清涼殿などの主要な宮殿を、平安時代後期の建築様式に基づいて再興された復古調内裏でした。すなわち、寛政度内裏を造営するにあたっては、すでに途絶えてしまった儀式行事を再興することを想定して、それに相応しい母屋・廂から構成される寝殿造の宮殿が造営され、室内に舗設する調度についても、古式をふまえて製作されました。寛政度内裏が焼亡したのち、安政年間に再興された新造内裏も寛政度を踏襲した復古調内裏でした。この安政度内裏が現在の京都御所です。

飛香舎は中世以後には造営されなくなっていました。寛政六年(一七九四)に新清和院(光格天皇の中宮・欣子内親王)が入内する際に、儀式を行なう部分を中心に復古調で再興され、安政度にも造営されました。ここに紹介する調度は、この安政度内裏の飛香舎で用いられていたものです。その形式は、平安時代の『類聚雑要抄』などの文献に典拠があるもので、寝殿造の調度を窺いうる希少な実例です。

Thematic Exhibition

## Furnishings from the Higiyosha of the Kyoto Imperial Palace

Tuesday, October 2–Tuesday, December 25, 2018 Room 14, Honkan, Tokyo National Museum

After being lost to a fire in 960, the Imperial Palace was reconstructed multiple times over the centuries. The reconstructions of 1790 and 1855 represented a revival as the main buildings and furnishing were created in the classical styles of the Heian period (794–1192). The Imperial Palace rebuilt in 1790 was lost in yet another fire, but the one rebuilt in 1855 stands to this day as the Kyoto Imperial Palace. The Higiyosha, which functioned as the residence of the empress at the Inner Palace, was also rebuilt on both of these occasions. The works presented here – rare furnishings made in classical styles – are from the Higiyosha reconstructed in 1855.



じんまくら きくかもんらでんまくらぼこ  
沈枕・菊花紋螺鈿枕箱  
Pillows with a Storage Box  
H-4733



まつくいづるまきえらでんにかいざし  
松喰鶴時絵螺鈿二階厨子  
Two-tiered Cabinet; Design of cranes  
with pine sprigs in maki-e lacquer and  
mother-of-pearl inlay

幅 87.6、高 61.2 H-4726

厨子の上部に棚を設ける二階厨子。厨子棚ともいいます。梨子地に蒔絵螺鈿で松喰鶴文を表わします。脚先に金銅金具が付き、棚の上段には、入内の際に用いる一対の沈枕(香木製の枕)を置きます。沈枕の上には薄い布団が置かれ、蜀江錦の覆いが被せられます。枕箱には梨子地に螺鈿で菊花紋を表わします。

世にたぐひなしと見奉り給ひ名高うおはする宮の御容貌にも  
 なほ匂はしやはたとへむ方なくうつくしげなるを  
 世の人光る君と聞こゆ藤壺ならび給ひて  
 御おぼえもとどりなりなればかかやく日の宮と聞こゆ

『源氏物語』桐壺



飛香舎 画像：宮内庁京都事務所提供



飛香舎の壺庭に咲く藤 画像：宮内庁京都事務所提供

寝殿造の宮殿や邸宅では、帳台<sup>ちやうだい</sup>という寝台を据え、その周囲に調度を舗設<sup>ほせつ</sup>しました。寝殿造の調度は、中国の唐<sup>とう</sup>から伝わった器物をもとに、日本の建物や動作に適應<sup>に</sup>した二階厨子<sup>にかいずし</sup>や二階棚<sup>にかいだな</sup>などの器形が工夫されて、日本で発達した蒔絵<sup>まきえ</sup>や螺鈿<sup>らでん</sup>などの技法で裝飾されました。

中世になると、各部屋を間仕切<sup>まじきり</sup>って棚や畳を備え付ける書院造の建築様式が発達します。寝殿造の建物や調度は衰退し、それらは公家階層の居住空間として追憶<sup>おぼえ</sup>されました。近世末期になると、復古調<sup>ふこてう</sup>によって造営<sup>かんせい</sup>された寛政度内裏<sup>かんせいあんせい</sup>と安政度内裏<sup>あんせいあんせい</sup>では飛香舎も再興<sup>さいきやう</sup>されました。

ただし飛香舎の再興は、儀式に必要となる母屋<sup>もや</sup>や廂<sup>ひさし</sup>を中心に造営<sup>かんせい</sup>され、居住施設となる部分は省略<sup>しょうりゃく</sup>されたので、正式には飛香舎代<sup>ひえいしやだい</sup>といいました。再興された飛香舎の調度には蒔絵螺鈿<sup>まきえらでん</sup>によって松喰鶴<sup>まつくいづる</sup>文<sup>ぶん</sup>が表わされていました。



まつくいづるまきえらでんにかいだな  
 松喰鶴蒔絵螺鈿二階棚  
 Two-tiered Shelf; Design of cranes with pine sprigs  
 in maki-e lacquer and mother-of-pearl inlay  
 幅 85.2、高 43.0 H-4725  
 ひとり けずつき だこ うちみだりばこ  
 火取、沓坏、唾壺、打乱箱  
 Incense Burner, Cup for Hairdressing water,  
 Spittoon, Toiletries Box  
 H-4732, H-4727, H-4731, H-4724

上下段の棚板をもつ二階棚。上段には火取と沓坏、下段には唾壺と打乱箱を置きます。火取は香を焚く器で、蒔絵螺鈿を施した火取母のなかにある銀製薰炉<sup>くんろ</sup>で香を焚いて金属線<sup>くわんごせん</sup>で編んだ火取籠<sup>ひとりも</sup>を被せ、その上に衣類をのせて薫りを移しました。沓坏は髪を梳く水(米のとぎ汁とされます)を入れる容器で、銀製の蓋<sup>ふた</sup>・坏<sup>すりわん</sup>から構成され、蒔絵螺鈿を施した台<sup>だい</sup>が付きます。唾壺は唾を吐き入れる壺です。打乱箱は櫛<sup>くし</sup>など整髪具を入れる箱です。



まつくいづるまさえらでんきょうだい  
松喰鶴蒔絵螺鈿鏡台

Mirror Stand; Design of cranes with pine sprigs in *maki-e* lacquer and mother-of-pearl inlay

H-4705

鏡台は鏡を懸ける道具。支柱の上部には左右に広がる上手を設け、下部には五方に広がる鷺脚を設けています。上手と鷺脚は折り畳むことができる構造に見せかけていながら、折り畳みません。上手に鏡枕を吊り下げ、その上に鏡台羅と入帷を被せ、鏡を鈕に結んだ緒で懸けます。



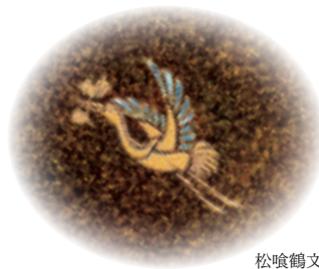
[参考]  
鏡を鏡台に懸ける方式  
『類聚雑要抄彩色図』  
江戸時代  
B-2055-6



おしどりからくさはちりょうきょうまつくいづるまさえらでんかかまぼこ  
鴛鴦唐草八稜鏡・松喰鶴蒔絵螺鈿鏡箱  
Mirror with Pointed Eight-lobed Rim and Box; Design of mandarin ducks and an arabesque (mirror); design of cranes with pine sprigs in *maki-e* lacquer and mother-of-pearl inlay (box)

H-4713

鏡と鏡箱。鏡は白銅製で八稜形に作られ、背面には鴛鴦と唐草の文様を表わします。鏡箱は鏡の形状に合わせて八稜形に作られ、鏡箱をのせるための四本の鷺脚をもつ台があります。鏡台の横に並べて置きました。鏡箱・鏡台ともに梨子地に蒔絵螺鈿で松喰鶴文を表わします。



松喰鶴文



きょうそく  
脇息

Armrest

長 101.8、高 35.2 H-4730

このように直線的な形の長い脇息は、古い形式のもので、座席の前方に置き、甲板に両肘をかけてくつろぎました。手水のときには、脇息に袖をかけて両手を差し出し、湯水をかけてもらう作法もありました。紫檀で作られ、甲板の両端に方形の銀象嵌があります。



燈台・切燈台

Tall and Short Light Stands H-4722

燈台は屋内に設置する照明具。円形三重の台の上に、中ほどを細くした柱を立て、頂部に三脚の金輪かなわを設けます。金輪の上に油環あぶらつきをのせて油を入れて、燈芯とうしんをひたして点火し、鉸こうという鉄形金具で燈芯を揺き上げて火を調整しました。低い燈台は切燈台といえます。



燈籠

Lantern H-4728

燈籠は屋外にある燈火が消えないように覆いを付けた照明具。火袋ひぶくろの四面に木瓜形の窓を開き、上方には煙を出すための透かし彫りがあります。一面を扉とし、内部に金輪かなわを設けて、ここに油環あぶらつきを置きます。上部の環状金具に麻綱あさづなを通して、廂むすぶに吊り下げました。



松喰鶴蒔絵螺鈿火桶

Brazier; Design of cranes with pine sprigs in maki-e lacquer and mother-of-pearl inlay

H-4720

火桶だんは冬期に暖をとるための調度。黒漆地に蒔絵螺鈿で松喰鶴を表わします。寝殿造しんでんづくりの建物では使用の目的に応じて調度を備え付けました。4月1日と10月1日には、夏物と冬物の調度や服飾を取り替える更衣こうりがえが行なわれました。夏期には火桶は撤収されました。



松枝蒔絵美麗几帳台

Stand for Decorative Cloth Partitions

H-4734

几帳いつじょうは間仕切りに用いる道具。その構造は、土居つちいという基台に柱を立て、横木を渡して帷かたびらを垂らします。柱の高さの寸法によって三尺几帳・四尺几帳・小几帳などがあり、用途に応じて寄几帳よせいつじょう・枕几帳まくらいつじょう・差几帳さしなどがあり、装飾的な帷を垂らす美麗几帳がありました。



犀形鎮子

Weights in the Shape of Xi

E-20874

鎮子おもしは帷などが風にあおられたりしないように押さえる重石。この鎮子は金銅製で、一角獣すはまが州浜すはまの上に立つ形式です。一角獣には内反りの角、垂れた耳、先端に房のある尻尾などが見られます。『類聚雑要抄』に記載される犀形鎮子を意図したものと見なされます。

・作品はいずれも江戸時代・19世紀、サイズの単位はcm。  
 ・作品はいずれも東京国立博物館所蔵で、それぞれに所蔵番号を付している。  
 ・本特集は科学研究費助成基盤研究(C)「東アジア礼制に基づく物質文化研究—日・中・韓・越・琉の宮廷工芸を対象として—」(研究課題番号17K03054)の成果の一部である。